Nagoya Linguistics(名古屋言語研究)
2014 Vol.8, pp.43-55

難易を表すヤスイ・ニクイが要求する「比較の読み」

鈴木基伸（大手前大学）

要旨

難易を表すヤスイ・ニクイは，「～することが容易・困難だ」への言い換えがなされることがあるが，その逆のパラフレーズによって，必ずしも適格なヤスイ・ニクイ文が産出可能となるわけではない。この問題に対し，本稿では，ヤスイ・ニクイが成立するための条件として，「比較の読み」が要求されることを主張する。「比較の読み」は，ヤスイ・ニクイが持つ形容詞的特性から説明でき，形容詞全般にも当てはめることができる基本的条件であることを示す。さらに，Sapir (1944) が述べた「標準比較」と「対象比較」の区別を用い，「比較の読み」がヤスイ・ニクイの成立に関与していることを論証する。また，日本語教育において，「容易・困難だ」からヤスイ・ニクイへとパラフレーズを行う際，「比較の読み」という観点を取り入れることにより，不自然さを伴わないヤスイ・ニクイ文が産出可能となることを述べる。

1. はじめに

日本語の形容詞性接尾辞の中には，接続した動詞が表す動作に対して「難易」の意味を添加する形式が幾つかある。「容易さ」を表すものには，ヤスイ（「持ちやすい」），ヨイ（「書きよい」），「困難さ」を表すものには，ニクイ（「わかりにくい」），ガタイ（「忘れがたい」），ヅライ（「読みづらい」）がある（益岡・田窪 1992）[1]。この中で，ヤスイ・ニクイは，動作遂行・実現の〈容易・困難さ〉を表す代表的な形式としてまとめて扱われることが多い。日本語教育においてヤスイ・ニクイが教授項目として取り上げられる際，「～することが容易・困難である」等にパラフレーズされ[2]（庵他 2000），「容易・困難な」動作を表す形式として説明される。そしてそのヤスイ・ニクイと「容易・困難だ」との関係から，日本語学習者は，「容易な動作」であればヤスイが，「困難な動作」であればニクイが使えると考えがちだが，その考えは必ずしも正しいとは言えない。なぜなら，動作が「容易・困難だ」という属性を持つからといって，ヤスイ・ニクイが常に許容されるわけではないからである。

(1)a. ひらがなを覚えることは容易だ[3]。　　b. ひらがなは覚えやすい。
(2)a. 漢字を覚えることは困難だ。　　b. 漢字は覚えにくい。
(3)a. 自転車を買うことは簡単だ。　　b.?自転車は買いやすい。

---

1 本稿における「難易文」は，ヨイ，ガタイ，ヅライによって表されるものではなく，ヤスイ・ニクイが用いられているものに限定する。

2 ヤスイのパラフレーズは「～することが簡単だ」「容易に～できる」，ニクイのパラフレーズは「～することが難しい」「なかなか～できない」を用いても可能である。

3 Inoue(1978)は，ヤスイ・ニクイの意味に関わる用件として，動作の意志性・無意志性（±self-controllable）を挙げた。動作が意志的である場合「難易」の意味に，無意志的である場合には「傾向」の意味に解釈される。したがって，本稿が考察の対象とするのは，意志動詞に接続するヤスイ・ニクイである。また井上(1976)は，「難易」の場合「目的語繰り上げ規則」及び「目的格が配置規則（原文ママ）」がかかるとし，ヲ格，ニ格などの非ガ格がガ格へと格交替することについて言及しているが，本稿では，格交替の問題については扱わない。

(4)a. ピアノを弾くことは難しい。　　b.?ピアノは弾きにくい。

(1b)(2b)は，ヤスイ・ニクイの成立に不自然さを伴わない例であり，「覚えることは容易だ→覚えやすい」「覚えることは困難だ→覚えにくい」というパラフレーズが成立している。一方，(3b)(4b)はヤスイ・ニクイ文が不自然さを伴う例であり，「買うことは簡単だ」「弾くことは難しい」から「買いやすい」「弾きにくい」への言い換えが認められにくい。このように，ヤスイ・ニクイ文の産出に際して，動作が「容易・困難だ」という属性を持つことは，必要条件[4]ではあるが，十分条件ではなく，それ以外に関わる条件について考察する必要がある。また，ヤスイ・ニクイを教授項目として扱う際には，その条件について言及し，説明しなければならない。

ヤスイ・ニクイの先行研究を見ると，ヤスイ・ニクイが成立するための条件についてはあまり言及されておらず，「難易」と共に生じる「傾向」の意味が動詞の種類（意志・無意志）によって異なることや，格配列のパターンによって「難易」「傾向」の意味が変化することなどが主に論じられている（井上 1976，Inoue1978，佐藤 1988，加藤 2001，井上 2005）[5]。そこで本稿では，これまで論じられることが少なかった，難易を表すヤスイ・ニクイの成立に関与する条件に焦点を当て，ヤスイ・ニクイ文が適格に成立するための条件を明らかにすることを主たる目的とする。

2. 本稿の主張

元来形容詞であるヤスイ・ニクイは，動詞に接続する接尾辞として機能しながらも，形容詞的特性を有する。仁田（1975）は，形容詞の意義素性として「相対性」を挙げ，「大きい」という判断が名詞句（属性主）に与えられる場合のプロセス，及び〈大きさ〉の性質について以下のように述べている。

(5) 大きいか大きくないかの認定は，一定の基準に照らし合わせてなされるのである。そういった意味合いにおいて，無条件に絶対的に真に大きいなどといった物は存在しない。「大キイ」という形容詞の意味する〈大キサ〉は，相対的に連続的にしか成立しえないものなのである。　（仁田 1975:63）

ヤスイ・ニクイが表す〈容易・困難さ〉もこれと同様であり，相対的に決定されるものである。また，形容詞は，評価を与える名詞句を尺度（scale）上に置く。例えば「X は大きい」は，X

---

[4] ヤスイ・ニクイを用いる際，動作主にとって当該の動作が「容易・困難」でなければならないが，動作の遂行・実現が不可能なものは，ニクイで標示することはできない。
(i)a. 100mを9秒で走ることは難しい。　b. *100mは9秒で走りにくい。
(ii)a. 10分間息を止めることは難しい。　b. *息は10分間止めにくい。
このことから，ニクイで標示されるためには，あくまでも実現の可能性が残されていなければならならず，必要条件の一つとして扱うべきであるが，本稿での言及はこれにとどめる。

[5] Inoue(1978)は動作が意志的である場合「難易」の意味に，無意志的である場合には「傾向」の意味に解釈されるとした。したがって，本稿が考察の対象とするのは，意志動詞に接続するヤスイ・ニクイである。また井上(1976)は，「難易」の場合「目的語繰り上げ規則」及び「目的格が配置規則（原文ママ）」がかかるとし，ヲ格，ニ格などの非ガ格がガ格へと格交替することについて言及しているが，本稿では，格交替の問題については扱わない。

が〈大きさ〉という尺度において，対応する比較対象の中で，その程度が上位に位置していることを意味する（Cresswell1976, Seuren1978, Hay1998[6]）。このことから，「X ハ V ヤスイ・ニクイ」[7]という構文形式を取る場合，主題名詞句 X は，〈V ヤスサ・ニクサ〉という尺度（scale）上に置かれ，対象との比較によってその程度が測られる。

(6)　この鉛筆は書きやすい。　　(7)　熱いお茶は飲みにくい。

(6)は，「この鉛筆」が，〈書きやすさ〉という尺度上において，他の鉛筆に比べ，上位にあることを意味している。また(7)では，「熱いお茶」が，冷たいお茶，ぬるいお茶など，他の温度のお茶と一緒に〈飲みにくさ〉という尺度上に置かれ，それらの中で上位に位置することが表されている。

(6)(7)については，主題名詞句「この鉛筆」「熱いお茶」が〈書きやすさ〉〈飲みにくさ〉という尺度上に置かれた場合，比較対象となるべきもの（「その他の鉛筆」「熱くないお茶」）が，聞き手にとって想定されやすいと言えるが，次のような場合，何と比べられているかが明らかであるとはいえない。

(8)　?鉛筆は書きやすい。　　(9)　?お茶は飲みにくい。

(8)は，「鉛筆」が〈書きやすさ〉という尺度の中で上位に位置することが表されているが，その尺度上に位置する他のものが何であるのかが想定しづらい。当然〈書きやすさ〉という点では限定されるが，それがボールペンなのか万年筆なのか，または種類は異なるが「書く」という行為を行いうるパソコンなども含まれるのか，などが明らかではない[8]。(9)も同様であり，「お茶」が何と比べられて「飲みにくい」という評価が与えられているのかが明確とはいえない。比較の対象が明らかではないということは，結果として，難易評価を判断するための比較が成立しないことになるため，「書きやすさ」「飲みにくさ」の程度も表すことができないことになる。それゆえ(8)(9)には不自然さが伴うのだと考えることができる。

このように，比較対象が聞き手にとって明確な場合はヤスイ・ニクイが容認され，明確でない場合不自然さを伴うことが，(6~9)において観察されるが，比較対象の明確さ，不明確さを分ける要因は何であろうか。本稿ではそれを「主題名詞句の限定性」に求める。(6~9)から分かるように，指示詞や形容詞によって名詞句が限定されている場合，比較の対象を容易に想定できるが，そのような限定する要素がない場合，比較対象は想定しづらくなる。これは形容詞においても同様である。

---

6 "Adjectives map object in their domain to degrees on a scale. Evaluating the truth of a statement such as *x is large*, involves comparing to the degree to which x is large, to a contextually relevant comparison class."(Hay1998:2)

7 「X ガ V ヤスイ・ニクイ」のように，ガ格が用いられる場合も当然あるが，ヤスイ・ニクイが元来形容詞であり，「容易・困難だ」という性質・属性を表していることから，「属性叙述」（益岡 1987）の性質を持つといえる。属性叙述文は有題文であることが一般的であるため，本稿でも，有題のヤスイ・ニクイ文のみを取り扱う。

8 (8)の不自然さに関しては，ボールペンなどの他の道具と比べて，〈書きやすさ〉という尺度上で鉛筆が上に位置するという事態が一般的ではないことも原因として考えられるが，本稿では，比較対象の不明確さがヤスイ・ニクイ文の不自然さに関与しているとして議論を進める。

(10)　このテレビはかわいい。　　(11)　??テレビはかわいい。

(12)　名古屋の街はきれいだ。　　(13)　??街はきれいだ。

名詞句が限定されれば比較対象が明らかになるのは，それによって比較されうる対象の範囲が狭められることによる。指示詞や形容詞によって名詞句が限定された場合，〈Vヤスサ・ニクサ〉または形容詞が表す尺度上に置かれる比較対象は，名詞句が属する種に限定される。例えば，「この鉛筆」であれば「鉛筆」という種に，「熱いお茶」なら「お茶」という種に限定される[9]。種が限定されれば，その中で性質は異なるが同種のもの（「あの鉛筆」「太郎君の鉛筆」，「冷たいお茶」「ぬるいお茶」など）が尺度上に並べられるものであるため，比較対象の想定は容易である。他方，限定する要素がない場合，その尺度上に置かれる対象物は，種を問わなくなる。主題名詞句が「鉛筆」「お茶」であれば，その種を越えて，「ワイン」「アボカド」などでもよいことになる。だが実際には，「鉛筆」と「ワイン」，「お茶」と「アボカド」という全く種の異なるものを同一の尺度上（〈書きやすさ〉〈飲みにくさ〉）に並べて比較することが一般的であるとは言えない。そのため聞き手は，「種は限定されないが，比べられても不自然ではないもの」を想定しなければならない。これは聞き手に解釈上の負担を与える[10]ものであり，結果として比較対象の想定が困難となる。

以上のことから，主題名詞句を限定することによって，比較の解釈が成立するようになるが，名詞句の限定は，上記したような，指示詞，形容詞の他，以下のように，連体修飾節による修飾や，固有名詞の使用によっても可能である。

(14)　父に買ってもらった車は乗りやすい。

(15)　トヨタクラウンは乗りやすい[11]。

(14)(15)については，次のような比較関係が成立する。

(14)'　「父に買ってもらった車」と「父に買ってもらった車以外の車」との比較

---

[9] 種の限定は，文脈によって変化しうる。「鉛筆」「お茶」という種に限定される場合もあれば，「書くための道具」「飲み物」へと，より幅広い種へと拡大される場合もある。したがって，「鉛筆」「ボールペン」などは，同じ種として扱われる場合もあるということである。この「種」に関する問題については，詳細な議論が必要であるが，本稿ではこれ以上立ち入らない。

[10] 加藤（2003a:xv）は，解釈を成立させるために負担しなければならない知的処理作業を数量的に捉え，「解釈のコスト」と称した。「解釈のコスト」が高い場合は負担が大きく，低い場合は負担が小さい。そして「解釈のコストが限界を超えて大きくなれば，その言語形式は非文となる」（加藤 2003a:xvi）と述べている。

[11] 指示詞，連体修飾節によって名詞句が限定されている，または固有名詞が用いられていても，不自然さを伴うような例がある。

(i)　?{この／父に買ってもらった}車は{売りやすい／売りにくい}。

(ii)　?トヨタクラウンは{買いやすい／買いにくい}。

これは，主題名詞句「この車／父に買ってもらった車」，「トヨタクラウン」が，「売りやすい・にくい」「買いやすい・にくい」という属性を有することが自然であるか否かという側面から説明できる。(14)(15)では，「乗りやすい」という属性を持つことが表されているが，車が，「乗りやすい」という属性を持つことはあっても，「売りやすい・にくい」「買いやすい・にくい」という属性をあらかじめ有していると考えることはやや不自然だといえる。このように，主題名詞句が限定されていても，その名詞句の表す事物の属性として考えられる〈Vヤスサ・ニクサ〉でなければ，その適格性は保たれないといえる。したがって，主題名詞句とそれが取りうる属性に関する問題は，「比較の読み」とは別の条件として扱われるべきであるが，この問題については別稿に譲る。

(15)' 「トヨタクラウン」と「トヨタクラウン以外の車」との比較

主題名詞句の限定性によって，「ヤスイ・ニクイの尺度上において比較されていることが理解可能なこと（以下，『比較の読み』と称する）」が聞き手にとって明らかである場合，ヤスイ・ニクイは成立し，そうでない場合，不自然さが伴うようになる。またこの「比較の読み」は，ヤスイ・ニクイが持つ形容詞的特性から説明できるものであり，形容詞的接尾辞としてのヤスイ・ニクイが成立するために必要とされる条件であると考えることに大きな不合理はない。そこで本稿では，以下のことを主張する。

(16) 本稿の主張
ヤスイ・ニクイは，成立のための条件として「比較の読み」を要求する。

次節では，この「比較の読み」について詳しく述べる。

3.「比較の読み」とは

本節では，「比較の読み」が具体的に何を意味するのかということについて論じる。「XハVヤスイ・ニクイ」構文を取る(6)(7)における比較関係を，再び以下のように示す。

(6)' 「この鉛筆」と「この鉛筆以外の鉛筆」との比較
(7)' 「熱いお茶」と「熱くないお茶」との比較

これからわかるように，比較されるのは主題名詞句Xと，Xに対応して尺度上に置かれうるその他の名詞句である。つまり，「XハVヤスイ・ニクイ」構文における「比較の読み」とは，「主題名詞句が対応する他の名詞句と比較されていることが聞き手にとってわかる」ことを指す。

また，主題名詞句以外にも，デ格等によって表される名詞句が，対応する他の名詞句と比べられることによって「比較の読み」が可能となることもある。(17)(18)のような，「XハNデVヤスイ・ニクイ」という構文においては，デ格名詞句による「比較の読み」が成立しうる。

(17) うどんはスプーンで食べにくい。　(18) マラソンはサンダルで走りにくい。

この場合，主題名詞句「うどん」「マラソン」が，〈スプーンでの食べやすさ〉〈サンダルでの走りにくさ〉という尺度上に置かれ，それ以外の「食べ物」「陸上競技」と比較されているという解釈も成立するが，同時に，デ格名詞句である「スプーン」「サンダル」が，〈うどんの食べやすさ〉〈マラソンの走りにくさ〉という尺度上で「スプーン以外の食器」「サンダル以外の履物」と比較されていると考えることもできる。この場合，「スプーン」「サンダル」は，前節で述べたような修飾句によって限定されてはいないが，デ格が用いられることにより，尺度上に置かれる比較対象は，「スプーン，サンダル以外のデ格によって標示される名詞句」に限定されることになる。つまり，デ格名詞句に修飾句がついていなくても，デ格が用いられること

によって，名詞句の限定がなされているのである。ゆえに，(17)(18)において「スプーン」と「スプーン以外の食器」，「サンダル」と「サンダル以外の履物」という比較関係を，聞き手は読み取ることが可能となる。(17)(18)はデ格の例であるが，デ格以外の格助詞でも可能である。

(19) 秘密は他人に言いにくい。　　(20) 旅行は近所の人と行きにくい。

(21) 富山は名古屋から行きやすい。

このように，〈Vヤスサ・ニクサ〉の尺度上に置かれる名詞句は，主題名詞句のみならず，斜格名詞句[12]でも可能である。

以上は，「比較の読み」が「主題・斜格名詞句の比較」として成立する場合であるが，尺度上に置かれ比較されるのは名詞句に限られるわけではない。

(22) 携帯のキーボードは，両手を使うと打ちやすい。

(23) 日食は雲が出たら見にくい。

この場合，比較関係は以下の通りである。

(22)' 「両手を使う場合」と「両手を使わない場合」との比較

(23)' 「雲が出ている場合」と「雲が出ていない場合」との比較

状況の対比が明示されるようなト・タラ節が用いられることによって，尺度上で比較されるのは名詞句ではなく，特定の異なった状況となる。

上述の内容から，聞き手にとっての「比較の読み」が，具体的に何を指すのかということについて，以下のようにまとめることができる。また，前節で言及した主題名詞句が限定され，「比較の読み」が成立する条件についても合わせて示す。

(24) 「比較の読み」とは，〈Vヤスサ・ニクサ〉という尺度上に置かれる主題・斜格名詞句の比較関係が，聞き手にとって明らかであること，または，ト・タラ節によって提示される状況と対立する状況が想定されることを言う。なお，主題名詞句は，指示詞，形容詞句，連体修飾節による修飾，固有名詞の使用によって「比較の読み」が明らかとなる[13] [14]。

---

[12] 加藤（2008）に従い，ガ格以外の格助詞を「斜格」として扱う。

[13] 主題名詞句が限定されていなくても，容認されるヤスイ・ニクイがある。

(i) おにぎりは作りやすい。

(ii) デッキシューズは滑りにくい。

これらは，「おにぎり」「デッキシューズ」が指示詞や形容詞句によって限定されるわけではないが，「比較の読み」が成立していると考えられる。なぜなら，「おにぎり」であれば，「簡単に作れる食べ物」という属性を有していると考えることも可能であるため，〈作りやすさ〉という尺度に置かれた場合，その比較対象物は「食べ物」に限定されるからである。また，「デッキシューズ」は，「滑り止めのゴムが付いた靴」であるため，〈滑りにくさ〉という尺度に置かれた場合，比較対象は「履き物」に限定される。このように，主題名詞句が表す事物の性質によっても，尺度との関係から比較対象が限定され，「比較の読み」が可能となる場合がある。

[14] 「比較の読み」のあり方は，(24)以外にもあると考えられるが，これ以上の分析は本稿の主眼ではな

4. 仮説と検証

本節では，本稿の主張である「比較の読み」が，本当にヤスイ・ニクイの成立条件に関与するのか，ということについて，Sapir（1944）によって示された「程度評価（grading)」における２つのタイプを用い，仮説の提示と検証を行う。

4. 1. 標準比較文と対象比較文

Sapir（1944）は，形容詞などが表す程度（grade）が定められるうえで，「標準値（平均値)」を参照にする場合と，「比較」を用いる場合があることを指摘した。

(25) Type I . Graded with reference to norm
(1) Norm: at a normal distance from; of average quality
(2) Lower-graded: at a less than normal distance from
(3) Upper-graded: at a more than normal distance from
Type II . Graded with reference to terms of comparison.
(1) Lower-graded: at a less distance than
(2) Upper-graded: at a greater distance than (Sapir1944:96)

Type I は標準値（norm）を基準とし，それを上回るか，下回るかによって程度評価がなされるが，Type II では，そのような標準値は設定されず，特定の対象物との比較によってのみその程度が測られる。Sapir（1944）は，Type II のみに「比較（comparison)」という用語を用いているが，Type I も，実質的には「標準値」との「比較」がなされているとみなしてよい。したがって本稿では，前者を「標準比較(文)」，後者を「対象比較(文)」と称し，両者を区別する。(26)(27)に標準比較文，(28)～(31)に対象比較文の例を示す。

(26) 太郎は背が低い。
(27) イチゴはおいしい。
(28) 180 センチの太郎は 190 センチの賢二より背が低い。
(29) イチゴはみかんよりおいしい。
(30) 太郎はクラスで最も背が高い。
(31) イチゴは果物で一番おいしい。

(26)(27)は，「太郎が平均身長」と比べて背が低いこと，「イチゴが他の食べ物が有する平均的な味」と比べておいしいこと，が表されており，いずれも標準値[15]との比較がなされ，その程度が測られている。一方，(28)(29)は，「190 センチの賢二」「みかん」という特定の比較対象が提示されているため，標準値は比較の基準となっていない。また，(30)(31)は，「太郎」「イチゴ」の比較対象は「クラスの残り全員」「イチゴ以外の果物全て」であり，比較対象は明示されていないが，特定されていると考えることができる。標準比較と対象比較の比較対象をまと

い。したがって，暫定的にこのような定義をする。

[15] 形容詞の中には数値化できないもの（「きれい」「かわいい」「やさしい」など）もあるが，便宜上このように表記する。

めると以下のようになる。

(32)　標準比較と対象比較の比較対象
　　標準比較：標準値
　　対象比較：特定の対象物

標準比較と対象比較における比較対象の違いは，結果として「比較の読み」の可能性に影響を与える。対象比較の場合構文的に比較対象が示されているため，聞き手にとって主題名詞句と「比べられているもの」が明らかである。それゆえ，対象比較文は「比較の読み」が常に成立する。一方，標準比較文の場合，比較対象は標準値であるため，尺度上に置かれる比較対象が何であるかは，聞き手にとって明らかではない。したがって，標準比較文において「比較の読み」は必ずしも可能になるわけではない。標準比較文とは，比較構文を取らない形容詞述語文と捉えることも可能であるため，「比較の読み」の可否は，前述したような主題名詞句の限定性等によって異なる。標準比較文と対象比較文における「比較の読み」の可能性について以下のように示す。

(33)　標準比較文：「比較の読み」が必ずしも可能ではない
　　対象比較文：「比較の読み」が常に可能となる

本稿では，この標準比較文と対象比較文における「比較の読み」の可能性の違いがヤスイ・ニクイの成立に影響を及ぼすと考え，以下のような仮説を立てる。

(34)　仮説の提示
　　① 対象比較文では，ヤスイ・ニクイは常に容認される。
　　② 標準比較文では，主題名詞句が，(24)の条件に従って限定されている場合，ヤスイ・ニクイは容認される。

4. 2. 仮説の検証

4. 2. 1. 標準比較と対象比較におけるヤスイ・ニクイ成立の違い

以下の例は，指示詞によって主題名詞句が限定されているものである。(35)(36)は標準比較，(37)(38)は対象比較のヤスイ・ニクイ文である。

(35)　このワインは{飲みやすい／飲みにくい}。
(36)　このシューズは{履きやすい／履きにくい}。
(37)　このワインはさっき飲んだワインより{飲みやすい／飲みにくい}。
(38)　このシューズはさっき履いたシューズより{履きやすい／履きにくい}。

(35)では，「このワイン」が，「標準的なワインの味，その他のワインの味」と比べられており，(36)では，「このシューズ」が「標準的なシューズの履き心地，その他のシューズの履き心地」と比較されている。そしてその比較を通してヤスイ・ニクイによって表される「難易」の評価

が与えられている。(37)(38)は，「さっき飲んだワイン」「さっき履いたシューズ」という特定の対象物との比較を通して難易の判断がなされている。この場合，標準比較の(35)(36)，対象比較の(37)(38)は，いずれも適格である。このように，主題名詞句が限定されている場合，標準比較か対象比較かの違いはヤスイ・ニクイの成立に影響を与えていない。しかしながら，次の例のように，主題名詞句が限定されていない場合，標準比較文だと不自然になり，対象比較文だと適格となる例が観察される。

(39)　?ソフトボールは蹴りやすい。
(40)　?先生は話しにくい。
(41)　ソフトボールはゴルフボールより蹴りやすい。
(42)　先生は親より話しにくい。

(39)(40)は，特定の対象物が提示されていないため，不特定の対象との比較を表す標準比較のヤスイ・ニクイである。そしてこの場合，不適格とまでは言えないが，不自然さが感じられる。一方，(41)(42)は，「ゴルフボール」「親」という特定の比較対象が明示されている対象比較である。この場合，ヤスイ・ニクイに不自然さは感じられず，適格だと言える。このように，標準比較文では容認されにくいヤスイ・ニクイが，対象比較文では容認されるようになる場合がある。

(39)(40)がなぜ不自然だと感じられるかと言えば，「ソフトボール」「先生」が，「蹴りやすい」「話しにくい」という属性を有していることが認めにくく，その比較の状況が想定しづらいことがある。(39)では，ソフトボール以外の球体であるテニスボール，サッカーボールなどと比べてのことなのか，それとも人やスリッパなど，ボール以外のモノと比べてなのかがわかりにくい。(40)もこれと同様であり，「先生」が，それ以外の人物，または弁護士，歌手などの他の職業と比べられているのかが不明である。つまり，比較が成立する状況の想定が困難であること，聞き手にとって「比較の読み」が可能ではないことが，ヤスイ・ニクイを不自然に感じさせていると考えられる。

一方，ヤスイ・ニクイが適格となっているのは「比較の読み」が常に可能な場合である。(37)(38)(41)(42)のような対象比較文では，既に述べたように「比較の読み」が可能となる。また，(35)(36)におけるヤスイ・ニクイは標準比較文であるが，「このワイン」「このシューズ」というように名詞が限定されているため比較対象の想定が可能である（「このワイン」と「その他のワイン」，「このシューズ」と「その他のシューズ」）。この結果，聞き手にとって「比較の読み」が可能となっている。

以上の観察によって，対象比較においてヤスイ・ニクイが常に容認されること，標準比較においては必ずしもヤスイ・ニクイが容認されるわけではないことが確認できた。

4. 2. 2. 標準比較文における名詞句の限定

標準比較のヤスイ・ニクイは，対象比較と異なり，「比較の読み」が常に可能となるわけではないが，名詞の限定によって，「比較の読み」の成立を可能にしうる。そしてそれは，これまで述べてきたように，ヤスイ・ニクイの容認度に影響をおよぼす。

(43)a. ?車は{乗りやすい／乗りにくい}。　b. この車は{乗りやすい／乗りにくい}。
(44)a. ?傘は借りやすい。　b. 100円の傘は借りやすい。
(45)a. ?パンは食べにくい。　b. 固すぎるパンは食べにくい。

いずれの場合も(a)と(b)とでは主題名詞句の限定性が異なっている。(a)は限定されておらず，(b)は限定された名詞である。(b) では，名詞が指示詞や修飾句によって限定されることにより，尺度上の比較対象物になりうる対象の範囲が狭められ，「比較の読み」が可能となる。(43b)では「この車」と「この車以外の車」，(44b)では「100円の傘」と「100円の傘以外の傘」，(45b)では，「固すぎるパン」と「固すぎないパン」，との比較が鮮明となっている。一方，(a)の「車」「傘」「パン」はいずれも限定されていないため，(43a)ではその他の乗り物，(44a)では傘以外のモノ，(45a)ではパン以外の食べ物と比較されているとする解釈も成立するが，いずれも(b)に比べその「比較の読み」が成立する可能性は低いと言えるだろう。つまり，主題名詞句が限定され，「比較の読み」が可能となることが，ヤスイ・ニクイ文の適格性に関与していることがわかる。

以上，(34)に提示した仮説について考察を行った。その結果，対象比較文ではヤスイ・ニクイが常に成立し，標準比較文では，名詞句の限定性の違いによってヤスイ・ニクイの成立が異なり，限定されていれば成立し，そうでなければ不自然さを伴うことが明らかになった。このことは，「比較の読み」が可能な場合ヤスイ・ニクイが成立し，反対に「比較の読み」が可能でなければ成立しないことを意味する。以上の考察結果を踏まえ，ヤスイ・ニクイが成立の必要条件として「比較の読み」を要求することを改めて主張したい。

5.「容易・困難だ」からヤスイ・ニクイへのパラフレーズについて

最後に，これまでの議論を基に，動作主にとって「容易・困難な」動作が必ずしもヤスイ・ニクイに置き換え可能ではないという問題について考察する。1節で述べたように，「～することが容易・困難だ」は，必ずしもヤスイ・ニクイに置き換えられるわけではない。

(46)a. ひらがなを覚えることは容易だ。　b. ひらがなは覚えやすい。(=(1))
(47)a. 漢字を覚えることは困難だ。　b. 漢字は覚えにくい。(=(2))

(46a)(47a)は，「ひらがなを覚える」「漢字を覚える」という動作（事態）が，〈容易・困難さ〉という尺度の中で，標準値を上回っていることを表している。これをヤスイ・ニクイ文へパラフレーズすると，(46b)(47b)のようになる。そしてヤスイ・ニクイ文では，程度を測る尺度が〈覚えやすさ〉〈覚えにくさ〉へと置き換えられ，その中に「ひらがな」「漢字」という主題名詞句が置かれるようになる。つまり，「容易・困難だ」からヤスイ・ニクイへとパラフレーズされることによって，尺度及び尺度上に置かれる難易評価の対象物（主題名詞句）が置き換えられる。

表 1.「容易・困難だ」とヤスイ・ニクイの尺度及び尺度上に置かれる難易評価の対象物の違い

述語形式	「容易・困難だ」		ヤスイ・ニクイ
尺度	〈容易・困難さ〉		〈V ヤスサ・ニクサ〉
尺度上に置かれる難易評価の対象物	コト節によって標示される事態	→	主題化された名詞句，斜格名詞句，対比される状況や事物

「容易・困難だ」からヤスイ・ニクイへのパラフレーズが成立するためには，〈容易・困難さ〉という尺度上の事態を，〈V ヤスサ・ニクサ〉の尺度へと置き換えても「比較の読み」が保たれるようでなければならない。(46b)では，「ひらがな」が〈覚えやすさ〉の尺度上に置かれているが，「漢字」「カタカナ」等の「ひらがな以外の文字」が「ひらがな」の比較対象となりうることは，日本人および日本語学習者であれば容易に想定可能である。また同様に，(47b)において「漢字」が〈覚えにくさ〉の尺度で測られた場合，「ひらがな」「カタカナ」等の文字を比較対象として捉えたとしても，それは不自然な解釈とはいえない。つまり，(46b)(47b)では，「ひらがなを覚えること」「漢字を覚えること」という〈容易さ〉〈困難さ〉の尺度上にある事態が，〈覚えやすさ〉〈覚えにくさ〉の尺度に置き換えられた結果，主題名詞句が「ひらがな」「漢字」となっても，聞き手にとって「比較の読み」が保たれているのである。

しかしながら，ヤスイ・ニクイへとパラフレーズされた後，聞き手にとって比較対象が明確でなく，「比較の読み」が成立しない場合がある。

(48)a. 自転車を買うことは簡単だ。　　b.?自転車は買いやすい。(=(3))
(49)a. ピアノを弾くことは難しい。　　b.?ピアノは弾きにくい。(=(4))

(48a)(49a)における，「自転車を買うこと」「ピアノを弾くこと」は，ヤスイ・ニクイ文においては，「自転車」「ピアノ」が主題名詞句となり，それらが〈買いやすさ〉〈弾きにくさ〉という尺度上に置かれるが，指示詞や形容詞句等によって主題名詞句が限定されていないため，〈買いやすさ〉〈弾きにくさ〉の尺度上に想定される対象は動詞と関連するものであれば何でもよいことになる。既に述べたように，名詞句が限定されていない「自転車」「ピアノ」では，聞き手にとってその比較対象を想定することが困難であり，「比較の読み」も成立しない。(48b)(49b)に不自然が伴うのはそのためである。

このように，〈容易・困難さ〉から〈V ヤスサ・ニクサ〉の尺度へと置き換えられる際に「比較の読み」が成立しないような場合，ヤスイ・ニクイ文は容認されなくなってしまい，パラフレーズすることができない。したがって，「～することが容易だ・困難だ」からヤスイ・ニクイへとパラフレーズを行う場合は，尺度を〈V ヤスサ・ニクサ〉上へと移行しても「比較の読み」が保たれるよう，ヤスイ・ニクイ文の主題名詞句に置き換えられるような名詞句には，あらかじめ指示詞や形容詞句を付加して，限定しておく必要がある。

(50)a. 安い自転車を買うことは簡単だ。　　b. 安い自転車は買いやすい。
(51)a. 古いピアノを弾くことは難しい。　　b. 古いピアノは弾きにくい。

以上は，標準比較の「容易・困難だ」文をパラフレーズする際に生じる問題点であったが，対象比較文の場合，明示された比較関係が保持され，「比較の読み」も成立するため，パラフレーズ上の問題点は生じない。

(52)a. カレーを作ることよりビーフシチューを作ること（の方）が容易だ。
b. ビーフシチューはカレーより作りやすい。
(53)a. 自転車に乗ることより一輪車に乗ること（の方）が難しい。
b. 一輪車は自転車より乗りにくい。

日本語教育においても，このような，パラフレーズに伴う尺度・尺度上の評価対象物（主題名詞句）の変化を考慮に入れ，パラフレーズ後も「比較の読み」が可能となることが，ヤスイ・ニクイ文成立のための条件であるということについて言及すべきである。また，そうすることによって，不自然さを伴わないヤスイ・ニクイ文の産出が可能となり，学習者を混乱させることなく，難易文の指導が可能となる。

6. 結語

本稿では，ヤスイ・ニクイが形容詞的特性を持ち，その価値が相対的に決定されることから，「ヤスイ・ニクイの尺度上において比較されていることが理解可能なこと」が読み手にとって明らかである，という「比較の読み」が成立の条件として要求されることを主張し，それを支持する議論を行った。また，Sapir(1944)が述べた，程度評価を行う際の「標準比較」「対象比較」という分類を用いて仮説の提示，検証を行った。その結果，「比較の読み」がヤスイ・ニクイの成立に関わっていることを明らかにすることができた。また，本稿での主張に基づけば，〈容易・困難さ〉を根拠としてヤスイ・ニクイを用いた場合に産出される不自然なヤスイ・ニクイ文をより適格性の高いものに修正することが可能である。さらにその理由についても説明が可能であり，不自然さを伴うヤスイ・ニクイ文の産出を防ぐことができる。以上のような理由によって，ヤスイ・ニクイを教授項目として扱う際に「比較の読み」という観点を導入することで，従来よりもさらに精緻な難易文の指導が可能になると思われる。

参考文献

庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.

井上和子(1976)『変形文法と日本語（上）』大修館書店.

井上和子(2005)「日本語の難易文をめぐって」『言語教育の新展開』ひつじ書房.

加藤重広(2003a)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.

加藤重広(2003b)「語用論的に見た『可能』の意味」『富山大学人文学部紀要』38号, 87-98.

加藤重広(2008)「日本語の構文における昇格と降格」『科学研究費補助金・基盤研究(C)・研究報告書（平成17～19年度）日本語受動構文の構造的意味と推意に関する語用論的原理の記述的研究』pp.129-146.

加藤紀子(2001)「日本語の可能・自発と難易文」『意味と形のインターフェース 中右実教授還暦記念論文集』くろしお出版，pp.293-303.

佐藤ちゑ子(1988)「難易文の派生について」『文経論叢』24号，弘前大学人文学部，69-88.

仁田義雄(1975)「形容詞の結合価」『文芸研究』第 79 集，pp.59-69.

仁田義雄(2002)『新日本語文法選書 3 副詞的表現の諸相』くろしお出版.

益岡隆志(1987)「叙述の類型と文の構造」『言語学の視界』大学書林，pp.161-177

益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法－改訂版－』くろしお出版.

Cresswell, M. (1976) The semantics of degree. In Partee, B (eds.), *Montague Grammar*. Academic Press, NewYork.

Inoue, Kazuko(1978) 'Tough sentences' in Japanese. John Hinds and Irwin Howard(eds), *Problems in Japanese syntax and semantics*, pp.122-154.

Hay, J. (1998) The non-uniformity of degree achievements. *In Papers presented at the 72nd Annual Meeting of the Linguistics Society of America*, New York, pp.1-7.

Sapir, E. (1944) Grading: A study in semantics. In Mandelibaum, David (ed.), *Selected writings of Edward Sapir in language, culture and personality*. Berkeley: University of California, 122-149.

Seuren, P. (1978) The structure and selection of positive and negative gradable adjectives. *In Papers from the Parasession on the Lexicon, CLS*, 14. University of Chicago, 336-346.